2004-2005 東京漢方入門講座

第3回（通算23回）『もう一つの鍵』

2004.11.18

今回のタイトルは『もう一つの鍵』です。

「鍵」とは扉や金庫を開けるときに必要なもの。そこから転じて「物事の真相をつきとめる時に重要なポイントとなるもの」という意味を持ちます。

わたくしたちが患者さんの症状を確認し、その原因がどこにあるのか、そこにどのような問題点があるのか。それをつきとめる時にも、そして対応するときにも「鍵」は必ず存在するはずです。

我々が解決しなければならない様々な愁訴. 時には容易に対応可能、時には知恵を絞らなければならないケースもあります。
西洋医学で対応するべきか、東洋医学で解決するべきか。これも様々なケースが存在するはずです。より適切に対応できる方を選ぶ、それが正しい考え方だと思いますが、それでは何がそれを決めるのか。

それぞれの医学には問題解決のための「鍵」が用意されています。どちらを選ぶか、その決定は「扉を開けることができる鍵」がどちらにあるのかということが一つの要素でしょう。

本日は番外編で「オーダーメイド治療」という言葉についてとりあげてみます。
どうぞその意味を踏まえながら「東洋医学の鍵」についてお考えになられてみてください。
そして漢方処方の目的を解き明かすために必要な「もう一つの鍵」についても。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。

さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日のkeyとなる生薬】

桂枝　　茯苓

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、
そしてどのような「鍵」を握っているのでしょうか。

【本日の内容について、ご確認ください】

【桂枝】

桂枝加竜骨牡蛎湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、竜骨、牡蛎
柴胡桂枝乾姜湯：柴胡、黄芩、栝楼仁、乾姜、牡蛎、甘草、桂枝
桂枝人参湯：桂枝、人参、乾姜、蒼朮、甘草
桃核承気湯：桂枝、桃仁、大黄、芒硝、甘草
女神散：当帰、川芎、黄芩、黄連、香附子、木香、桂枝、人参、丁子、甘草、蒼朮、檳榔子

【茯苓】

半夏厚朴湯：半夏、生姜、茯苓、厚朴、紫蘇葉
加味逍遙散：柴胡、山梔子、薄荷、当帰、芍薬、牡丹皮、茯苓、蒼朮、生姜、甘草
酸棗仁湯：酸棗仁、甘草、知母、川芎、茯苓
抑肝散：蒼朮、茯苓、当帰、川芎、柴胡、甘草、釣藤鈎
清心蓮子飲：蓮肉、黄芩、地骨皮、麦門冬、茯苓、車前子、人参、黄耆、甘草

【桂枝と茯苓】

苓桂朮甘湯：茯苓、桂枝、蒼朮、甘草
苓桂味甘湯：茯苓、桂枝、五味子、甘草
苓桂甘棗湯：茯苓、桂枝、甘草、大棗
桂枝茯苓丸：桂枝、茯苓、桃仁、牡丹皮、芍薬
柴胡加竜骨牡蛎湯：柴胡、黄芩、半夏、人参、生姜、大棗、桂枝、茯苓、竜骨、牡蛎
五苓散：桂枝、茯苓、蒼朮、沢瀉、猪苓

ポイント

■「気」と「水」

浅岡俊之
www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

東洋医学に用意された「人の身体の状態を把握するためのソフト」として

という三要素から考える方法があることは前回ご説明いたしました。本日はそのなかの「気」に着目いたします。

「気」とは目には見えないが自然界に（もちろん私たち人間にも）存在するエネルギーのこと。例えば「電気」とか「磁気」というものは目には見えませんが 物を動かしたり引きつけたり、何かの作用を持っていますね。われわれも同様、気の働きで肉体が動いていると東洋医学では考えます。だから血や水もこの気の力で運行されているのです。よって気が不調になれば血や水の変調、ひいては身体全体の不調にもつながるというわけです。

気の異常は基本的には「気虚」「気鬱」「気逆」という病態に分類されます。

気虚とは「気」が不足すること。活力が湧かない、積極的な気持ちになれない、などなど。そうです、ショックなことでもあれば誰にでも起こりうることです。きっとどなたも経験されているはず。決して特殊な病態ではありません。「ふられて、食欲減退」なんてこと、誰にだってあることです.

気鬱とは「気」の巡りが悪くなってしまい、いろいろな支障が起こること。代表的な症状として咽中炙鬱（ノドに炙った肉がひっかかったような感じ）―食道神経症―などがありますが、その他にも様々な症状の原因となるものです。気が巡らなければどこかに「気」が停滞することになりますが、その場所は心下部。それを見破る東洋医学の診察方法として心下痞の証明があります（簡単ですのでどうぞ実践してみてください）。

気逆とは体内を巡るはずの「気」が下から上へ一方的に上衝（ジョウショウ）してしまうこと。結果として上半身や頭に気が充満、下半身は気が不足、ということになります。そうなるとどうなるか。気は熱源でもありますので、「頭は熱く、足は冷える」の冷えのぼせが出現することになります.

本日の題名は『もう一つの鍵』です。今まで違う分野の処方であると思っていたものが実は同じライン上の処方であった、それを理解するうえで必要になる「東洋医学の鍵」をご紹介いたします。どうぞ、東洋医学の目線で考えることによって「もう一つの鍵」を手中にお収めください。